

PF 懇談会新会長挨拶

PF 懇談会会長 朝倉清高
(北海道大学触媒化学研究センター)

三木邦夫先生より、PF 懇談会会長を引き継ぎました北海道大学触媒化学研究センターの朝倉清高です。2年間ではありますが、どうぞ宜しくお願いします。



私事になりますが、30年前に東京大学理学部化学教室の黒田晴雄先生の研究室に卒業研究で配属されて以来のPFとの付き合いであり、PFに育てていただきました恩が少しでも返せると思い喜んでおります。

私の分野はX線吸収分光いわゆるXAFSです。XAFSは、放射光を光源とすることで、物質科学における一般的かつ不可欠なキャラクタリゼーション手法になり、多くのユーザがPFを利用するようになりました。技術には、生み出され確立するまでの揺籃期、それが広まっていく発展期、そして多くの一般ユーザの利用する成熟期という3つの相があると思いますが、現在は多くのPFの手法が成熟期に達していると思います。PF懇談会もこの3つの相に対応し、その役割を変えてきたと思います。今は、成熟期を迎え、PFを利用していかにユーザが良い科学を展開するかということがPF懇談会の第1の任務と考えられます。

さてPFも再来年で、30年を迎えます。人間の一生もそうですが、PFが物理的にいつまでも今のままの機能を持ち続けることはできません。いずれシャットダウンとなるでしょう。いまPFでは、次期計画が真剣に検討され、準備が進んでいます。ERL(Energy Recovery Linac)です。2000年前後に、次期計画として、今のストレージリング型の放射光か、FELかあるいは、ERLかという3つの可能性が真剣に議論されました。そして、わたしたちがえらんだのは、既存技術の延長線上にあるストレージリング放射光でも、未知な技術ながらコヒーレントで短パルスが得られるFELでもないERLという計画でした。ERLは、現在の多くのユーザのニーズを満足し、21世紀半ばのトップレベル光源として、高いコヒーレンス、高輝度と短パルス時間構造を実現できる光源です。そして、PF懇談会はその計画を支持しました(ERLの詳細は、<http://pfwww.kek.jp/ERLoffice/index.html>をご参照下さい。)

もちろんERL計画は、ERLという新たな加速器とその付帯設備を作らないといけません。技術的にもチャレンジングな面を多数持っています。新技術はPFそして、内外の研究者の知恵と協力で必ずや達成できる困難だと信じています。さらに私たちを取り巻く財政状況も厳しいものがあります。赤字国債を大量に発行し、600兆もの赤字を抱える国家財政状況を見ると、この大きな負担を国民の皆

さんをお願いすることは、とても難しいように思えます。しかし本当にそうでしょうか？ PFは大学共同利用機関法人に属しています。このような大変な国家財政状況だからこそ、新しい科学の基盤として重要な大型施設を共同して建設し、利用する発想が重要に思います。競争的資金と言う形で、限られたパイを研究者が奪い合い、特定の個人、大学、プロジェクトに投資を集中させ、限られた研究のみを行い、世界をリードするごく少数の世界トップを生み出すことも一つの立派な科学技術政策です。一方で、多くの人が納得して、すこしずつ限られた資源と知恵を出し合って共同利用できる施設、設備を一か所に作り、多くの人が自由かつ平等にアプローチし、多くの萌芽的研究を開花させる方策ももう一つの科学・技術政策としてあり得ると思います。こうした共同利用と言う概念はPFという物理的な存在が消えたとしても生き続ける貴重な概念だと思います。

ERL計画は、PFが掲げている計画ではありますが、大学共同利用機関である限り、大学人の支援が必要です。さらには、国民の多くの人たちにも承認していただかないといけません。まずはPF懇談会の皆さんと議論し、本当に必要であることを再確認しつつ、気長にERL計画を説明し、広く多くの支援を得ていく努力が必要と思っています。ERL計画は一朝一夕で実現できるものではありません。在任中の目標として長期にわたりERL計画をPF懇談会が推進していける体制を作ることとしたいと思います。どうぞ宜しくお願いします。

今年度PF懇談会幹事会メンバー

- 利用幹事：腰原伸也(東工大院理工)
近藤 寛(慶應大理工)
篠原佑也(東大院新領域創成科学)
中尾裕則(KEK/PF)
- 行事幹事：渡邊信久(名大シンクロトロン光研究セ)
兵藤一行(KEK/PF)
- 広報幹事：沼子千弥(徳島大院ソシオサイエンス)
- 庶務幹事：雨宮健太(KEK/PF)
- 会計幹事：青戸智浩(KEK/加速器第七研究系)
- 編集幹事：吉岡 聡(九大院工)